

J.S.バッハの作品（鈴木大介編）

リュート組曲 第2番

バッハのリュート組曲は4つあるが、第3番、第4番は無伴奏作品からの編曲なので、リュートのために書かれたオリジナル曲は2つ（第何番という番号は後世に付されたものでバッハの企図ではない）。

第2番は編曲されたものではなく、リュートのために書かれた作品で、おそらく1740年頃、バッハのライプツィヒ時代に作曲されたと推測されている。変わった構成となっていて、前半はバロック時代のソナタのようにプレリュード、フーガが置かれ、後半は組曲（パルティータ）のように舞曲が並ぶ。全体に哀愁を帯びており、落ち着いた美感を醸し出している。

組曲 変ロ長調（無伴奏チェロ組曲 第4番）

無伴奏チェロ組曲（全6曲）が書かれた年代については、ケーテンの宮廷楽長時代（1717～23年）の前期と推定されている。組曲は4つの舞曲（アルマンド／クーラント／サラバンド／ジグ）を基本とし、第1曲にプレリュードを、ジグの前の第5曲にメヌエット・ガヴォット・ブーレいずれかの流行舞曲が置かれる。

組曲 変ロ長調は、無伴奏チェロ組曲第4番からの編曲。組曲の中では比較的地味だが、削ぎ落とされたようなシンプルさを持つ。第1曲は分散和音が織りなす音色の変化が美しいプレリュード。第2曲は素朴なアルマンド、第3曲のイタリア型クーラントは、リズムに新しい可能性を模索している。第4曲のサラバンドでは、清らかな旋律が和音をともなって歌われる。第5曲は同じ調性による対照的な2つのブーレ。第6曲はほとんど重音を用いず、速いテンポで流れていくジグ。

リュート組曲 第3番（無伴奏チェロ組曲 第5番）

無伴奏チェロ組曲第5番はバッハ自身がリュート用に編曲しており、全曲を通じてフランス風の性格を持つ難曲。第1曲はフランス序曲形式のプレリュード。第2曲はフランス風のアルマンド。第3曲は本組曲唯一の繊細なフランス型クーラント。第4曲は8分音符の分散和音が深い思索へと誘うようなサラバンド、第5曲では対照的な2つのガヴォットを挿入舞曲としている。第6曲は強拍部に付点リズムを用いた短いジグ。

組曲 ニ長調（無伴奏チェロ組曲 第6番）

無伴奏チェロ組曲第6番からの編曲。無伴奏チェロ組曲の中では、技巧的にも内容的にも最もスケールが大きい。第1曲は、2本の弦にまたがって同音高を弾くなど、様々な可能性が試された高度なプレリュード。第2曲は叙情豊かなアルマンド、第3曲は軽やかで心地よいイタリア型クーラント、第4曲のサラバンドでは、演奏難度の高い重音のあいだを縫うように優美な旋律が生まれる。第5曲は素朴な雰囲気を持つガヴォットで、ヴァイオリン編曲などでもよく弾かれる。そして、多彩な音型が入念に組み合わされた第6曲ジグで本組曲はフィナーレを迎える。